

森羅万象に「ふるさと」を探る人

壺阪輝代第六詩集『探り箸』に寄せて

「ふるさと」とは、何か。そんな問いが時に、ふっとわきあがってくるときがある。懐かしい原風景や自分を育ててくれた山河、そしてその場所に暮らす人間たちへの感謝を想起する瞬間かもしれない。また自分が理解されず苦しい思いを抱えているけれども、懐かしい場所であるかもしれない。それは生きることの基底にある大切なものを取り戻す機会なのかもしれない。壺阪輝代さんの第一詩集から第五詩集を通読していて、そんな感想を抱いた。故郷、古里、故里という漢字を開き、ひらがなで静かに呼びかけられる「ふるさと」とは何か。壺阪さんはそんな「ふるさと」の問いに對して、詩を通して答え続けてきたのではないか。私は壺阪さんのそんな詩篇の試みがとても純粋なものであり、本来的な問いを秘めた詩であると感受している。

二〇〇六年暮れに山本十四尾さんを通して壺阪輝代さんがエッセイ集を出したいとの依頼があった。原稿が送られてきて山本さんと私で編集やアドバイスをして、『詩神』につつまれる時』(二〇〇七年九月)が刊行された。私は原稿を初めて読んだときから散文詩のようだと感じ、今も時々再読してい

る。壺阪さんの文章の魅力は、懐かしさが憧れのように感じられ、とても強い反復する力が文章の背後に秘められているのだ。それは一種の謎のようになって想像力を増してくる思いがする。エッセイ集の中に「ふるさとの古墳」という文章がある。この中に出てくる「月の輪古墳」の発掘体験が壺阪さんを「ふるさと」を絶えず思い起こさせるきっかけになったと思われる。次の文章が壺阪さんの紹介には最適だと思われるので、全文引用する。

「あなたの郷里はどこですか？」との問いに、以前の私は得意気に答えていた。「久米郡柵原町飯岡いづかです」と。それは、すぐに「ああ、あの月の輪古墳があるところですね」という言葉がかえってきたからだ。が、いつのころからか同じ質問をされ、こちらから古墳のことを話しても「その名前、聞いたことはありませんね」や「さあ、知らないですね」に変わってきた。考えてみれば、月の輪古墳が全国的に脚光を浴びたのは、一九五三年のことだから、半世紀以上も前のことになる。

山奥の小さな村にスポットが当たったのは、標高三二〇呎の山頂に、五世紀に造られた大きな古墳があったということだけではない。発掘調査を、専門研究者の指導のもとに、村民が自主的に行ったことだ。発掘の開始が八月だったこともあって、夏休み中の学生たちも多数参加した。協

力の輪は、近隣の市町村だけにとどまらず、全国的に広がっていた。最終的な参加者は、延べ一万人に達したという。当時小学六年生だった私も、竹べらを持って山を登った。雑木におおわれ、道などなかったはずの山また山に、大勢の人たちの足跡が新たな道をつけていった。あの時流した汗と、子供心に感じた連帯感も、今も胸の奥に熱く残っている。

先日帰郷した折、何十年かぶりに月の輪古墳に登った。母から、古墳まで車で行ける広い道路が開通したと聞いたからだ。舗装された道を歩きながら、幼い日に登った道を探したが、雑木が邪魔をしてみつけることはできなかった。が、ひとまわり小さくなったようにみえる古墳は、静かに私を迎えてくれた。

夕焼けが西の空を染めていた。幼い日よく歌った「いつか来た道」を口ずさみながら、私はしばらく時間を忘れていた。

「当時小学六年生だった私も、竹べらを持って山を登った。」と書かれてあり、ふるさとの山の古代の秘密を垣間見られるために竹べらで多くの人たちと共同して発掘をした。「月の輪方式」と言われて、戦後に皇国史観から解放された歴史学がこの民衆の力を借りて古代の歴史の真実を明らかにしていくモデルとなった発掘現場だった。山と川に囲まれた小さな町の少

女が、いつまでも壺阪さんの中に住んでいるのだ。「子供心に感じた連帯感も、今も胸の奥に熱く残っている」といった壺阪さんは、故郷の中に最も良きイメージを残している。古代の謎をみんなと一緒に掘り出していくことに、自分の原点をおいているのだろう。しかし壺阪さんは掘り起こされた剣・勾玉などの副葬品、そしてその当時の支配者であったろう男女二人の存在よりも、その共同作業に関わった熱い思いをずっと抱き続けている。二十七歳で刊行した第一詩集『夢をうつ』の中では、詩「ふるさとの位置」に心惹かれる。壺阪さんは若い頃から「ふるさと」と自分の距離を考えていて、その後の詩作の底流となるテーマを意識しているように感じられる。壺阪さんは飯岡から四、五十キロ離れた岡山の都市部の職場に就職した後に、一貫して「ふるさと」との距離感をどう考えていったらいいかを課してきたように思われるのだ。壺阪さんの中には、野いちごがあり千数百年も眠り続ける「ふるさと」と、その静けさを破り共同で新しい何かを作っていくといった変貌する「ふるさと」と、そして自分を育ててくれた父母の家族という「ふるさと」の三つがある。そこから出発し、そこに還っていく壺阪さんの多層化された「ふるさと」を紹介できればと考えている。

わたしがこの道のみつけたのは
ひとりで野いちごを探しにきたとき
まっすぐにつづいている白い道を
わたしは右足で軽くたたいた
右足でしっかりと立ったとき左足を

わたしは走った
両手を羽のようにうごかしながら

わたしはひき返すことができないくらい
とおくまで来ていることに気づいた
走ってきた道をふりかえると

わたしの足跡のうえに野いちごがこぼれ
空の青さがいちごをわたしに近づける
走っていく道を見つめると

白い道と白い空が
わたしを吸いこもうと身構えている
わたしの視界から

すべてのものが遠ざかる一瞬
わたしはふたたびはじめの位置にかえっていく

野いちごを探しに行った少女が、言い知れぬ開放感から鳥

になり、「白い道と白い空」に身体を投げ出してしまいう体験を
書き記したものだ。野と道と空と子供時代の自分が渾然一体
となる、不思議な経験が壺阪さんにあり、それが「ふるさと」
の基底になっているのではないか。自生している野いちごを
探して、自己を超えた自然との一体感に戻っていく「ふるさと
の位置」が壺阪さんの根底に存在している。壺阪さんは千
数百年前の自然を垣間見ているように感ずる。すると「白い
道と白い空が／わたしを吸いこもうと身構えている」。しかし
「わたしはふたたびはじめの位置にかえっていく」。二十代で
あった壺阪さんは、この詩によって「ふるさと」を自己の詩
の重要な課題であると認識し始めたのではないか。

次に「ふるさとはいま」という詩を取り上げてみたい。

ふるさとはいま

ふるさとはいまからっぽです
ふるさとはいま飢えています

りっぱな門構えの家があり
大きなだんろがあります

でもどうして
だんろの火は燃えないのでしょう
ふるさとはいまからっぽです

かたむきかけた台所のすみに
くもが巢をはった小さなかまじがあります
昔 かまじの火は
太陽のようにあたたかかったのです
ひとがそこにすわっていたからです

りっぱな食卓があり
御馳走がならべられた夜
でもどうして
それらは消えてしまったのでしょうか
ふるさとはいま飢えています

四季をうたう草木があり
熟した実がなっています
でもどうして
実は落ちなかったのでしょうか
ひとがそこに立っていたからです

かすかな声が
うしろむきに通り過ぎていきます
ふるさとからのたよりです
でもどうして

声はうしろむきなのでしょう
あなたがふるさとに背を向けているからです
あなたがふるさとはいまからっぽです
あなたがふるさとはいま飢えています
あなたが還ってこないからです

この詩集が出たのが一九六九年だから、壺阪さんは四十年
前に「ふるさと」の危機意識を「からっぽ」と指摘してい
る。なぜこのような「からっぽ」という表現をしたのだろう。
「ふるさと」の自然の恵みである熟した実を人が奪い、地には
落ちることなく、土壌はやせ細り、若者は故郷を捨て、還る
ことはない。その一人である自分を断罪しながら、この詩を
二十七歳の壺阪さんは第一詩集の中心テーマにしたのだった。
衰退しながら変貌していく「ふるさと」に戻りたいが戻れな
いといったアンビバレンツな感情が感じられる。「あなたが還
ってこないからです」という悲痛な一行は、壺阪さんのその
後の詩作を予見させる「ふるさと」を再生するにはどうした
らいいかという格闘の出発点になったものと思われる。

第二詩集『日を透る』は「ふるさと」の石との対話から成
り立っている詩篇である。その詩「わたしの舟」には、人が
石から感ずる太古の不思議な思いに肉薄している。

わたしの舟

ふるさとの
草むらのなかに横たわっていたひとつの石
扉ほどの大きさの石は
幼いわたしを誘ってやまなかつた
村を一望できる石の下へはいりこめば
わたしの知らない世界がひろがっているのではないかと

その石についてたずねたとき
その昔の死者がやどる石だと
母はこたえた
意味もしらず
いくどとなくその石の上で涙をかわかし
子犬とたわむれ
風の手を髪を梳かれながら夏をねむり
初冬の墓地にたてられた
あたらしい卒塔婆をながめながら
死のことを思ったりした

それからも
石はわたしのなかに居坐りつづけ
苔むした姿は

死者がやどる石だ」と答える。「わたし」はその石で遊んでい
ると、いつしかこの石が自分を運んでいく舟のようなもの
に思われてくる。「石のなかに満ちてくる大気の渦」という表現
は、例えば宮沢賢治のようにいかに石との豊かな対話がされ
ているのかを明かしている。都市部で暮らしている壺阪さん
は「ふるさと」の石を想起することによって、生きることの
生命力を維持しているかのような切実感を私は詩に感じるの
だ。「わたしはあの舟にのって／からみつく地上のつながりを
たち切るための／旅をしているのではあるまいか」という三
行は、賢治の銀河鉄道の夜のような異次元の幻想空間に飛躍
していく可能性を秘めている。壺阪さんの詩的精神は、「ふる
さと」の懐かしい事物に触れ合うように想起することによっ
て、新たな次元へと展開していったように思われる。賢治の
ように宇宙や土俗性をめざしながら、詩的精神は類似するも
のを感じる。

第三詩集『玄楠記』は、「ふるさと」の楠をテーマにした
二十二篇の連作だ。連作18の詩篇がようやく「ふるさと」に
還っていこうとする壺阪さんの魂の軌跡を象徴しているよう
に思われる。

玄楠記18

たずねる楠のありかを

背後にあるちからの呼びかけにこたえて
あれはわたしを運ぶ舟
もしかして

わたしはあの舟にのって
からみつく地上のつながりをたち切るための
旅をしているのではあるまいか

いつの日からか
わたし自身をながめるとき
石のレンズをとおしてみようになった
石のなかに充ちている大気の渦
そのなかにわたしを投じることの迷い
それらをふりきってなお進むとき
わたしを充たしている気が流れはじめる

私たちは旅に出るとその土地の石をなぜか拾ってきたくな
る。その土地の魂の欠片がその中に宿っているかのように無
意識に感じてしまうからではないか。身近にある石には鈍感
になつていてそんな心持ちになることは稀である。そんな石
に寄せる感受性を私たちはきつと忘れてしまっているのだ。
第一章の十五篇は、「ふるさと」の石について書かれた詩だ。
その中でも「わたしの舟」は心に残る作品だ。「扉ほどの大き
さの石」に魅せられた「わたし」が母に尋ねると「その昔の

腰のまがった老婆は教えてくれた
誇らしげに

いとしい者の消息を語るように

青蓮院の

勅使門のかたわらに立つ

樹令八百年の楠

大地を抱くように張った根は

この地を愛しつづけた老婆の心だ

楠の扉をひらくと

老婆は手招きして

そのなかへ消えた

後を追うわたしの前に現れたのは

見慣れたふるさとの風景

そこに立つて

わたしを呼びつづける一本の楠

血縁のもののように

わたしのたましいを結んでいる

もつとちがう楠を

もつとちがう自分を

みつげるために旅に出たが

やつぱりかえっていくのは
ふるさとのなか

楠はしずかに湧きあがっている
透明な涼しさをにじませて
幼子のように遊んでいる
見残した夢のように
わたしのなかに生きつづける
ふるさとの楠よ

連作1の出だしは「生まれることは／ひとつのふるさとを得ること」という二行から始まる。そしていつも懐かしく憧れのように想起されていた楠に再会する場面がこの連作18なのだ。楠は古代から神聖な樹木として大切にされてきた。それは支配者の専有物ではなく、その場所に暮らす多くの民衆によって、先祖を祭る命の継承として自然発生的に守り続けてきたのだろう。「見残した夢」とは、その命の継承に壺阪さんがかわり、詩作においてそれを果たそうと決意したからに他ならない。壺阪さんの詩には固有名はほとんど出てこないが、この詩によって初めて青蓮院と明記された。長い遍歴の果て壺阪さんは素直に「ふるさと」の樹木を受け入れ、直視できるような心境になったのだろう。楠の大樹に佇み、楠と静かに対話することが、「ふるさと」を問うことなのだと言

朝陽に輝いている
旅立ちの支度に色を着る
山の木の葉はその摂理に従順だ
それを愛でるにんげんからとおいところで
木は与えられないのちをみがいっている

わたしは何も語れなかった
父と娘という絆をこえて
差し出すことばがあったのかもしれない
なぐさめのことばでもなく
励ましのことばでもなく
父の魂に届くことばが

樹齢八百年
そびえ立つ杉の老木の前で
わたしは立ちつくしてしまふ
あまりにも静かに時のふところに身をゆだね
あまりにものびやかに
時をつきぬけているこのいのちに

わたしよりも一足早く
地上から去っていかうとしている父よ
あなたの生涯はあなただけのもの

げているようだ。樹木との対話ができる場所こそが「ふるさと」に相応しく、だからこそ「わたしのなかに生きつづける」のだろう。

第四詩集『川波・旅立ち』にも樹木と父をテーマにした詩「山深い神社の杉」がある。

山深い神社の杉

山深い神社の杉に逢いたいと思った
樹齢八百年

その樹が語りかけることばを聴きたいと思った
乗客はひとり
運転席の後に座って
車体が織りなすリズムに身をゆだねる

これはつかのまの逃避？
それともふかい祈りの旅？
父はいま
病院のベッドの中だ
七十年の生涯が
小さくなった肉体の裏側でほどかれている
(略)

色づきはじめた山々が

だれにわからず術もない
その淋しさはひとりで背負うもの
そしてわたしもまた

人は生まれかわり死にかわり
そのたびに山深い神社の境内で
杉の幹は太くなっていった
嵐にも倒れず 寒さにも枯れず
この地に根を張って生きつづけるちからを
人は誇らしく語り継いできたのだろう

両手を伸ばして幹を抱く
樹液はめぐり大地へ還る
樹の内側のそのいとなみは
いのちあるものの自然の道
父よ わたしはいま
八百年の時のしぶきを浴びている

この詩は、賢治で言うなら「永訣の朝」のような詩の位置付けになるだろう。死に行く父の病室から離れ、樹齢八百年の杉に逢いに行く。そして杉と無言の対話をするこゝによって、「父の魂に届くことば」にこだわり続けたことを断念する。そして父との語りつくせない言葉を樹齢八百年の杉から感じ

取るのだ。人の孤独を人の栄光のように思い直し、父が娘に託した思いを生きていることが父を生かしめることになる。無言の対話をしていくのだ。限りあるものとして死を受け入れて、人間のはかなさを超えて、伝え響きあう命の連鎖を八百年の杉に託し、絶唱しているのだ。

第五詩集『銀杏のなかの道』の詩「朝霧のむこうから」にも父との無言の対話を夢見る詩がある。

朝霧のむこうから

明け方の

寝床のなか

朝霧につつまれたまぶたの裏を

まっすぐに走つてくる男がいる

松明をたかだかと掲げて

わたしの方へ駆け寄ってくる

そのうしろには

直線状に続く男たちがいる

ああ 父さん

懐かしさに思わず声をかけると

その男は気恥しそうに

薄くなった頭髪をかき上げる

晩年の父の表情が戻ってくる

なにをしにきたの

わたしの問いには答えず

父は燃え残った松明に

おおきく息を吹きかけ

無言で差し出す

まだ残っている父の手のぬくもり

さかのぼって続く男たちの手のぬくもり

男親が子へ手渡すものは

魂を照らすかがり火

この火が照らす場所に

父はいまも住んでいるのか

人とかかわりのなかで

芽生えてくる熱いとげ

傷つくことを恐れて背をまるめるわたし

その姿をどこでみていたのか

父よ

いましばらく

このかがり火の中で寄り添っていたい

どこへかえるの

踵をかえした父に問いかけるが

答えはない

ふりむかないで

父は肩のあたりで手を振った

その先端から消えていく男たちの影

朝霧の向こうに消えていく

父の影

につながっていくように思われる。

私たちは誰から箸の使い方を教えてもらったのだろうか。そんな問いを胸にしながら新詩集『探り箸』の第一章は、八篇の「箸」を通して人生を語ろうとする連作から成り立っている。家庭の食事風景から次のような詩篇ができることは、壺阪さんが「箸」に「ふるさと」の現場を象徴させているからだろう。

落とし箸

ふいに 手元がゆるんで

落ちていく箸

母よ

痛む腰を曲げて拾わなくてもいい

あわてて言い訳などしなくてもいい

幼い日

はじめて箸を握ったあの日

わたしが落とし箸を

何度も拾い上げ

エプロンで拭いて持たせてくれた

励ましの声のぬくもり

夢の中で受け取った「魂を照らすかがり火」こそが生きていくために必要である豊かな言葉であったろう。壺阪さんは父の死後に父と対話しているのだろう。家族という「ふるさと」の重要な存在は欠けても、対話は生ある限り続くことをこの作品は告げている。父は男たちと一緒にこの地を守るべき存在となり、生きて自分をどこかで見守っていてくれるという思いがこの詩を書かしたものだだろう。亡くなった父が「ふるさと」に転化されていたように感じられる。「ふるさと」とは先祖という古い人たちが里山に眠っている場所であり、その人びとの一人になった父は、娘が心配で時に会いにくるのだ。娘の魂が枯渇してないか、もし枯れそうなら「魂のかがり火」を再び点火してくれるのだろう。そのように父の死を受け止めて、死後も父との無言の対話を繰り返しすうちに壺阪さんは、父母たちを通して「ふるさと」を探っていくと詩作を開始したのではないか。その試みが新詩集

わたしの人生の箸使いは
あなたから受け継いだもの
母と娘の

絆を今こそ食してください
あなたが育んでくれた
わたしの五味で
淋しさを充たしてください

いま何度でも
あなたの箸を拾って
こわばった手に持たせてあげる
わたしの心を添えて

私たちが父母たちから学んだことをこんなに素直に自然に
感謝をこめて、書かれた詩を読んだことがない。壺阪さんの
「箸」には人生の時間が宿っているのだ。生きることの勇気を
促した初めの一步は、箸使いを覚えさせてもらったことだと
いう。今は老いた母が箸を落とし、すまなそうにする母の心
情を察して、母へのいたわりを詩にこめていく。壺阪さんの
家族や母への愛情の深さが、一膳の箸使いを暖かな世界へと
変貌させるのだ。

最後に第二章「ふるさと」の背中」を引用する。詩「ふるさ

との背中」を読めば分かるとおり、「ふるさと」の探求はさら
に深みを増してきている。「ふるさと」に「母の背」を重ねる
壺阪さんの視線は、今の高齢化社会が担うべき大切なことが
何かを暗示している。娘のために柚の実を取り柚子味噌を作
ろうとする母の「ぬくもり」のような行為は、「ふるさと」そ
のものなのだろう。母子は亡くなった父や不在の他の家族を
思い出しながら、その変わらぬ味を探るように箸で摘み合う
だろう。柚子味噌を混ぜるように「家族と過ごした歲月」も
一緒に混ぜられ喉を通っていくのだろう。その今を生きる行
為に「ふるさと」とは、何かという問いの答えが垣間見え
てくる。それは身近な切実なものであり、この世の森羅万象
に「ふるさと」は宿っているのであり、それを自分なりの方
法で探っていくしかない、壺阪さんは静かに物語っている
ように思える。

多くの「ふるさと」にこだわり続ける人たちに『探り箸』
を読んでほしいと願っている。「ふるさと」を捨てて異郷で生
活し新たな「ふるさと」を探している人、古き場所を新たに
甦らせ「ふるさと」を創り出そうとしている人達にもぜひ読
んでほしいと願っている。

ふるさとの背中

さぎ橋を渡って

ふるさとへかえる
庭先の柚の木の下で
米寿の母を迎えてくれる
午後の陽さしを丸く抱いて
海老のように曲がったその背から
過去がにじむ

とおい昔

風呂焚きをしていた母の背が
さびしい島にみえて声をかけられなかった日
振り返らずに旅立ったわたし
あの日から
母は近づいたり 離れたり
わたしのまわりをまわっている

柚の実を取ってあげるよ
母はハズを持って庭に出る
伸ばした竿を器用にあやつりながら
おおきく熟れた実にねらいを定める
思わず後から背を抱く
かたい種子になったさびしさが胸をたたく

柚子味噌をつくる

家族と過ごした歳月をませる
つかの間おとずれるぬくもり

母の背はふるさとなりはじめている